2023.8.13 平和祈念礼拝　T.M

「戦禍の記憶」

１９４１年（昭和１６年）１２月８日、日本海軍がハワイの真珠湾を奇襲攻撃したことによって、日本と米・英・オランダ・中国などの連合軍との太平洋戦争が勃発した。一時は南方諸地域を制圧したが、４２年後半から守勢一方となり、次第に劣勢となってゆく。しかし大本営発表は、日本軍は敵を撃退し進軍していると報じた。国民はその情報を信じこまされていた。秘密裏に一部の官府は真相を知っていたらしい。小学生だった私は不安で恐ろしかったことを覚えている。戦況は悪化をたどり、東京大空襲をはじめ、広島、長崎への原爆投下、沖縄本島での地上戦等の後、日本は御前会議を経てラジオから玉音放送を流した。１９４５年８月１５日ポツダム宣言を受諾して無条件降伏をした。この戦争によって実に多くの犠牲者が出、大都市の壊滅ぶりは、全国に及ぶ損害であった。被爆者の苦しみは如何ばかりだったか計り知れない。東京は焼夷弾で焼け野原となり、私の親戚も犠牲になった。戦災孤児は居場所がなく、飢えに苦しみながら街をたむろしているニュース映画を観るのはとてもつらかった。

当時私は福島市に住んでいたので大都会の惨劇は経験していないが、地方においても戦争の厳しい影響は免れず、特に敵機襲来の兆しがあるとサイレンを鳴らして市民に知らせてくれることになっていた。警戒警報の時は、「う～ぅ～ぅ～ぅ～ぅ～ぅ～ぅ～ぅ～」と一分間位長く伸ばし、空襲警報の際は不気味に「う～ぅ～ぅ～」「う～ぅ～ぅ～」「う～ぅ～ぅ～」と短く途切れてサイレンが鳴り響く。その都度私たちは防空壕に入って身をひそめて危険が去るのを待つのだった。日常がこんな状態では勉強どころではなかった。また上空から人家が目立たないようにと、白い壁は墨で黒く塗られ、窓ガラスには細いテープのような紙を貼った。夜は電球の笠を黒い布で覆い、外部に光が洩れな

いようにした。登校はしていたが、勉強時間は多く削られ、大半は勤労奉仕にあてられた。校庭の２/３位土を盛り、畑にして作物を植えるための肥料づくりをした。校舎は市の外れにあったので、周りの田畑、荒れ地から草を刈り集め、上級生や男子生徒が校庭に運びうず高く草に水等をかけて腐らせて堆肥にする。それを校庭の盛り土の“畑”に埋めて、さつまいもやじゃがいもの苗を植え収穫を待つ。時期が来て生徒たちは一斉に芋掘りをすると、ごろごろとつながったさつまいもやじゃがいもが出てくる。みんなは歓声を上げて大はしゃぎで収穫を喜び、分け合った芋を家に持ち帰る。

　食料は乏しく、特に米は“兵隊さん”が食べるので、我々国民の主食は、麦、粟、粉、豆類で、私の母はさつまいもを小さく角切りにして混ぜ、米は少しだけという食事だった。病気になっても治療法が乏しく平均寿命は短かった。反面、日本は“神の国”だからこの戦争は必ず勝つと国民は信じていた。歴史によると、北条時宗の時代（１３世紀後半）に蒙古が二回攻めて来た。軍船四千隻もの大軍が筑紫の海岸を埋め尽くすばかりに迫って来た時、大暴風雨が吹き荒れ、船団は壊滅、退散したという出来事があった。“神風”が吹いたと信じられた。また１８９４年（明治２７年）の日清戦争、１９０４年（明治３７年）の日露戦争にも勝利しているので、日本は“神の国”だから太平洋戦争も勝利すると信じていたのである。莫大な軍事費、何にも代えがたい尊い人命。戦争ほど愚かで罪深いものはない。人類はいつもどこかで戦争と紛争を起こしている。有能な若者たちは国家のために散っていった。我が国は民主主義のもとに平和憲法を守り、戦後７０余年一応は平和である。これが長く続いてほしい。私が小学１年生の時に開戦、５年生の時に終戦となった。「平和の君」イエス・キリストの教えに立ち帰ろう。